あいご

NO WAR

園通信　令和８年１１月１日　第８号
キッドワールドセカンドこども園
園長　　高木　良司

朝晩の空気が冷たくなり、秋が深まってきました。

園児たちは、米良ひろばでもうすぐ来る運動会に向けて頑張っているところです。活動を楽しみながらもしっかり「努力」し、10月のめあてを達成しています。しかしながら園児たちは夢中であそんでいることなので、「努力」と感じていないかもしれません。また、そうなっていることが我々の理想でもあります。

さて、11月の大きなめあては「自信」です。園児たちは、一人一人が運動会の中に自分のめあてを持ちながら取り組んでいます。本番を乗り越えたときには、きっと「自信」となっていると思います。その自信がふくらんで自尊感情となり、自己肯定感につながるように、一人一人と大切に関わってまいりたいと思います。

＜これからの予定＞

11月　9日(月)　身体計測週間(～13日、すももぐみ、かりんぐみ、れもんぐみ)
11月14日(土)　運動会(お弁当日)
11月15日(日)　運動会予備日
11月16日(月)　身体計測週間(～20日、いちごぐみ、あんずぐみ、きういぐみ)
11月17日(火)　運動会予備日(3歳未満児クラス)
11月19日(木)　運動会予備日(3歳以上児クラス)
11月24日(火)　健康診断
11月25日(水)　歯科検診、誕生会
11月27日(金)　避難訓練(17時45分、火災想定)
11月30日(月)～12月11日(金)　保護者保育体験週間

思いやりの心のめばえ

近頃、米良ひろばでは、年下のクラスの園児へのあたたかい見守り行動が良く見られます。特に、いちごぐみとあんずぐみの園児がフィールド内に入ると、どこからともなく年上の園児が集まってきます。そして、思わず「〇〇ちゃんがんばれ～」「△△くんじょうず！」と応援する声が響きます。

これは、異年齢交流をしているからこそ生まれる他児への興味と関心の高まりからくるものです。愛しい気持ちを抱いているからこそ自然に出てくる姿であり、思いやりの心のめばえだといえます。

運動会当日に、このような自然な姿が見られることを期待したいと思います。



いちごぐみの応援をしています



いつの間にかこんなに集まっています



ゴール付近ではこんなにリラックスしています

＜避難訓練について＞

11月27日(金)は、17時45分より火災を想定した避難訓練を行う予定です。大変恐れ入りますが、その時間帯にお迎えに来られた保護者の皆様につきましては、職員の指示に従い、一緒にご協力いただけますと助かります。よろしくお願いいたします。

コラム８５：子どもに待つことを教える大切さ

キッドワールド総合園長　牧野 桂一

最近、私の周りの人たちの相談の中で、「子どもがキレて人にすぐに手を出してしまったり暴力を振るってしまったりする」とか「みんなが並んで待っているのに順番を守って待つことができない」というような悩みを持っている人がたくさんいて、その対応をよく聞かれます。そこで今回は、子どもに「待つことを教えることの大切さ」について考えて見たいと思います。

改めて、日常の子どもとの生活を振り返ってみると、子どもに待つことの大切さを教え、その力を育むためには、単に「おとなしくさせる」とか、単純に「我慢させる」ということでは身につくものではないようです。

この「待つ」という行動は子どもの心や脳の発達と深く結びついているため、それを理解するためには、子どもの発達と成長を根本的に深く捉え直していくことが大切だと言われています。この「待つ」という行動が形成されると子どもたちは、将来の人生の質をよりいっそう豊かに高めていくことができます。また、「待つ」という行動を身に付けていくと一人一人の子どもの人生が多様に豊かに構築されていきます。このように「待つ」という行動が形成されることは、これからの長い人生を生きていくために子どもにとっては非常に深い意味があります。

この「待つ」という行動形成を支える発達の基礎は、大脳生理学や発達心理学の視点から見ていくと、大きく以下のような価値や特性、意味があるといわれています。

まず、一番目として、子どもの感情や衝動をコントロールする力、つまり、自己コントロールする能力の基礎になるということです。子どもが「我慢をして待っている」時には、子どもの脳内では「今すぐやりたい。あの玩具が欲しい」という偏桃体の働きである受動的な衝動を、「いまは少し待とう」と理性的に押さえる脳の前頭前野の働きがなされています。つまり、自分の欲求や怒り、焦りといった感情の波を子どもは、自分自身で鎮めるための衝動性のコントロールのトレーニングを行っていることになるのです。ここで子どもは意にそぐわない状況や「思い通りにならない時間」に対する耐性（挫折耐性やストレス耐性）が育っていっているのです。

二番目に、「我慢をして待つ」ことにより、子どもは、「より大きな成果や満足」を得られる自己効力感につながる体験をすることになります。心理学における有名なスタンフォード大学の教授である心理学者ウォルター・ミシェルの「マシュマロテスト」に代表される、目先の小さな報酬をすぐに受け取るよりも、少し待ってより大きな報酬を得る能力（報酬延期能力）は、将来の学習意欲や目標達成力に強く関連しているとされているのです。「今すぐ遊ぶのを待って課題を終わらせれば、後で思い切り楽しく遊べる」「種をまいて世話をしながら待つからきれいな花が咲く」という過程の体験を通じて、子どもには見通しを持って努力する姿勢が身につき計画性と達成感が育まれていきます。そうすることによって、欲求をすぐに満たす以上の「待ったからこそ得られた深い喜びや達成感」という質の高い満足感を知ることができるのです。

三番目に、他の人との良好な関係を築く社会性・他者理解する力を育むことに特に役立ちます。人間社会の中で生きていく上で、「待つ」ことは、コミュニケーションの基盤になります。公共の場や遊具での順番待ちを通じて、自分だけでなく「他の人にも都合や欲求がある」ことを学び順番やルールの理解を進めます。相手が話し終わるまで待ってから自分の意見を言う、相手のペースに合わせるなど、他の人への配慮や思いやりの行動につながり、話を聞くという対人関係の円滑化を進める姿勢を育てていきます。

四番目に、待つことができる子は、衝動的にすぐ行動を起こすのではなく、「一歩引いて状況を観察する時間」を持つことができるなど思考力やじっくり考える問題解決能力の土台を育みます。そして、今どんな状況なのか、どう行動するのがベストかを一度立ち止まって考える観察力と判断力を育てていきます。また、すぐに答えや結果を求めず、じっくり試行錯誤したり物事の変化を観察したりする深い集中力と判断力を育てていきます。

五番目に、心の安定感と安心感を育てます。「待つ」という行動の裏側には、常に「待っていれば大丈夫」「見守られている」という心の安心感や信頼関係が存在します。「お母さん、お父さんは必ず戻ってくる」「待っていれば自分の順番が来る」という約束が守られる体験を通じ、子どもは周囲や未来に対する安全感や基本的人格の安定感を養い育てていきます。

最後に、子どもに待つことの大切さを教えることの意味は、はじめに説明したように単に「わがままを抑え込ませること」ではありません。子ども自身が「自分の感情の主人となり、将来の目標に向かって前向きに行動し、他の人と良好な関係を築いていくための『一生モノの道具（ライフスキル）』を授けること」にあると言えるのです。

ご家庭でのお子様との関わりの中でこのことを是非試してみていただきたいと思います。